

モード Mode Mode は語る

中野 香織

宝石と旧素材 絶妙コラボ

国立新美術館で展覧会「カルティエ、時の結晶」が開催されている。1970年代以降を中心に、個人所有の貴重なジュエリーを含む約 300点が展示されている。

会場構成を担当したのは杉本博司氏、榊田倫之氏が主宰する新素材研究所。日本の古い素材を用いた彼らのデザインが、カルティエの宝飾品の芸術的側面を引き立てる。新素材研究所とは、杉本氏が榊田氏と08年に設立した建築設計事務所。古代や中世、近世に使われた古い素材こそ最も新しいという理念のもと、旧素材や技法を現代に生かす挑戦を続ける。

展覧会で使われる旧素材は、例えば日

展覧会「時の結晶」

本古来の布である「羅」。この薄布を天井から垂らし、針が浮遊して見えるミステリークロックを覆いつつ透かし見せる。大谷石や屋久杉、神代杉といった自然素材も登場する。大谷石が宝飾品の台座として使われ、仏師が屋久杉や神代杉で彫ったトルソーにネックレスが飾られる。日本古来の自然と地球創生期に誕生した宝石とのコラボレーションは絶妙。持ち主ははかなく交代していくけれど、宝石は生き続けると思い知らされる。

一方、カルティエのデザインの源泉が世界各地にあることから、地球全体に想像力が及んでいく。エジプト、インド、中東、中国、日本など世界のあらゆる文



カルティエ パリの特注品
「スネーク」ネックレスと
仏師が彫ったトルソー

明や文化、そして動植物にヒントを得たモチーフは、地球が豊饒（ほうじょう）で多様な美しさにあふれていることに気づかせてくれる。とりわけコブラ、キメラ、スカラベ、ワニといった、不気味な生き物がモチーフになった宝飾品の、周囲をひれ伏させる迫力には鳥肌が立つ。畏怖をおぼえさせる強さがあるゆえに、時の権力者や世紀の美女がこうしたモチーフを身につけてきたのだ。

そのような壮大な時空を感じさせる美の世界を、2カ月半ただ1回の展示のために、多くの人々が時間と労力をかけて創り上げた。宝飾品は持ち主に返却しなくてはならないし、細部は二度と再現することができない。かくもはかなく崇高な人間の偉業を見続けてきた宝石は、それゆえに、いっそう価値があるのかもしれない。（服飾史家）